

Takashi FUJII

*Imperial Cult and Imperial Representation  
in Roman Cyprus.*

(藤井崇『ローマ期キプロスにおける

皇帝礼拝と皇帝の表象』)

山本晴樹

## I

藤井氏のこの著書は、氏の「前書き」によれば、ハイデルベルク大学に提出され、二〇一〇年四月に学位を授与された学位論文に基づいているということである。それに先だつて、氏は皇帝礼拝に関する論考を公にしている。

評者はこれまで専ら地中海西部の属州ガリア・ナルボネンシスにおける皇帝礼拝に取り組んできており、地中海東部の皇帝礼拝についてはほとんど触れる機会がなかった。ただ、キプロスはディオ (Dio 54, 4) によれば前二二年、ガリア・ナルボネンシスとともに元老院属州に再編成されているので、同時期に元老院属州となったキプロスにおける皇帝礼拝はガリア・ナルボネンシスのそれと何らかの比較の対象になるのかもしれないと感じていた。

今回、藤井氏の著作を取り上げるにあたっては、そのような比較をおこなうよい機会であり、以下そのことを念頭におきながら論評してみたい。

本書の構成は次のとおりである。

## 序章

第一節 本研究の目的と背景

第二節 ローマ期キプロスと皇帝礼拝

第三節 本研究の構成

第一部 広範囲な表象のなかの皇帝

第一章 ギリシア語で表現された皇帝

第一節 テオス (Theos) としての皇帝

アウグストゥス／リウイア (アウグストゥスの妻)／ユリア (アウグストゥスの娘)／ティベリウス／ネロ

第二節 セバストイ (sebastoi) に関する曖昧さ

第三節 その他の皇帝に関するエピソード

第四節 小 結

第二章 皇帝の彫像

第一節 証拠と方法

第二節 文脈のなかの皇帝の彫像

テクストの構造／地理的環境／用語法／彫像を建立する手続き

第三節 小 結

第三章 市民の場のなかでの皇帝の位置

第一節 神聖な場所

第二節 ギムナシア

第三節 劇場

第四節 小 結

第四章 キプロス人によるティベリウス帝への忠誠の宣誓

第一節 テクストの構造

第二節 テオイ・ホルキオイ (Theoi Horkioi)

キプロスの神々／ローマの神々

第三節 宣誓と皇帝礼拝

第四節 宣誓の内容／宣誓におけるティベリウスの位置

宣誓の文脈

状況／場所／宣誓の手続き

第五節 小 結

第二部 皇帝礼拝の政治的および社会的背景

第五章 皇帝礼拝を通してのコミュニケーション

第一節 皇帝礼拝における do ut des

建築活動／アジール権の承認／都市の名誉称号

／皇帝の戦術

第二節 一つのシステムとしての皇帝礼拝

第三節 皇帝礼拝の三つのレヴェル

第四節 小 結

第六章 キプロスの社会的・政治的枠組みのなかの皇帝礼拝

第一節 キプロスの皇帝礼拝祭司

第二節 階層社会のなかでの皇帝礼拝

独占と世襲／帝国貴族層への上昇

第三節 小 結

第三部 キプロス人の生活のなかでの皇帝

第七章 祝 祭

第一節 皇帝を名譽づけるキプロスの祝祭

エピニキア／カイサロゲルマニケイア／ネロネ

イア／アンティノオスを名譽づける祝祭／その

他の競技祝祭

第二節 小 結

第八章 皇帝と時間

第一節 年の名付け

即位紀元／ローマ権力に因んで名付けられた年

／貨幣の証拠／地方の日付システム

第二節 ローマ期キプロスの暦

ローマ・キプロス暦の導入と修正／ローマ・キ

プロス暦および他の暦の利用

終章 第三節 小 結

(付) ローマ期キプロスの皇帝礼拝関連碑文史料集

II

それでは各章の内容を順次紹介した上で、最後に評者の意見を付け加えることにしたい。まず序章ではこの著書の目的が述べられる。それによれば、目的には大きく二つあり、ひとつは従来の皇帝礼拝研究の見直しであり、他はローマ化という概念の見直しである。すなわち、皇帝礼拝に関しては、キプロスという属州の

社会的・宗教的文脈との関係が顧慮される必要が強調され、ローマ化に関してはキプロス固有の文化との関係が顧慮される必要が強調されている。そして、皇帝礼拝を皇帝とキプロスの人々とのコミュニケーションという視点から、別な表現をすれば中心と周縁とのコミュニケーションという視点から捉え直すことが提起されている。また、あたらしい視点として、「祭祀の移転 (cult transfer)」および「儀礼の移転 (ritual transfer)」という考え方が導入されている。<sup>⑧</sup>

第一部は「広範囲な表象のなかの皇帝」が取り上げられている。第一章ではまず「ギリシア語で表現された皇帝」が取り上げられる。キプロスでは皇帝に付けられるギリシア語のエピセトは主に *theos* や *sebastoi* などが使用されている。このうち *theos* はラテン語では *divus* に相当する語であるが、*divus* が死後、元老院によって承認される称号であるのに対して、キプロスでは *sebastos* を与えられていない皇帝やその家族にも *theos* の称号が贈られている場合がある。すなわち、ユリア、ティベリウス、ネロである。*theos* の使用で特徴的であるのはユリウス・クラウディウス期に限られるということである。次に *sebastoi* であるが、これは特定の皇帝ではなく、生死に関わりなく、皇帝およびその家族に与えられるもので、いわば皇帝権力の連続性を表すものである。*theos* がユリウス・クラウディウス期に限られるのに対して、*sebastoi* は一〜二世紀にわたって使用され、しだいに皇帝権力を抽象化していくものになっている。その他の用語も使用されているが、それらはそれ自身では神としての皇帝の宗教的地位を意味してはおらず、死すべき者(人間)から神までの広い範

囲における皇帝の位置を決定づける様々な部分を構成している。

第二章「皇帝の彫像」では、皇帝の彫像は名譽の対象としてばかりでなく、礼拝の対象としてキプロスの公共空間や宗教的な場所に存在していることが示されている。皇帝の彫像はキプロス人のローマ皇帝に対する態度を反映して、様々な意味合いと印象を与えている。藤井氏はこのような現象を「彫像習慣」(statue habit) という用語を借りて表現している。現在彫像は失われ、残っているのは台座とそれに記された碑文だけであるが、その制作年代はユリウス・クラウディウス期とりわけティベリウス期のものが最も多い。皇帝の彫像の置かれる場所は、単独ではなく他の神々の彫像の中に混在しており、次第に両者は同等なものにされていく。皇帝の彫像を建立するのは都市および参事会であり、都市の連合体であるコイノンは関与しない。またローマ官僚がこの礼拝に関しては介入することもある。藤井氏はこれを「属州人と帝国官僚との間のコミュニケーション」とみなしている。

第三章では、「市民の場のなかでの皇帝の位置」が取り上げられる。キプロス人の都市生活のなかでは、至る所で皇帝の存在が感じられる。すなわち聖域やギムナシオンや劇場においてである。しかし皇帝のための神聖な場は存在しない。ローマ期の聖域の中にある皇帝の彫像は必ずしも礼拝の対象であるとはかぎらない。皇帝はそこで常に礼拝を受けていたわけではないのである。

ギムナシオンは元来ローカル・エリートや支配者の信仰の場であり、ヘルメスやヘラクレスが信仰されていたが、キプロス島北岸のラベトウスではティベリウス帝の神殿と彫像が建立されていて、彼に対する礼拝が行われている。劇場に関して言えばキプロスの

首都パフォスでは、至善至高のユピテルにあたるゼウス・カピトリオスが両アントニヌス帝とともに礼拝されている。このようにキプロスにあつては、皇帝の位置づけは神々との関係によつて決められている。すなわち皇帝礼拝はキプロス人の伝統的な宗教的礼拝の枠組みのなかに位置づけられていたのである。

第四章「キプロス人によるティベリウス帝への忠誠の宣誓」では、一九五二年にキプロス島西部のパフォス・ウエトスにあつた島の守護神アフロディテの神域近くで発見された碑文 (Paphos Venus no. 8) が分析の対象になる。藤井氏によれば、この碑文は冒頭部分が欠落しているが、まずキプロス人の神々が列挙される。すなわちアフロディテ・アクライア、コレ、アポッロン・ヒュラテス、ヘステリアおよび父祖伝来のキプロス島の共同の男神・女神、これらに続いてローマ人の神々すなわち、神皇アウグストゥス、女神ローマ、他のすべての男神・女神が挙げられている。そしてこれらのキプロス人の神々とローマ人の神々にかけてティベリウス帝およびかれの子孫への忠誠が宣誓されている。この宣誓で注目されるのはティベリウス帝に神 (theos) の称号のないことである。これは帝国中央の方針に沿った措置であらう。

第二部は「皇帝礼拝の政治的および社会的背景」である。

藤井氏は第五章「皇帝礼拝を通してのコミュニケーション」において、まず皇帝礼拝での *do, deo, deo* (「相互授受」) の有無を確認している。氏によればキプロスでは、皇帝の恩恵付与と皇帝礼拝との間での因果関係は欠落している。すなわち *do, deo, deo* と皇帝礼拝との直接的な関係はみられないということである。例えばティベリウスによるパフォス・ウエトゥスへのアジュール権承認と

アフロディテへのティベリウスの彫像奉獻によるティベリウス礼拝との関連については明確な史料はないとしている。そして藤井氏はキプロスの皇帝礼拝には属州レヴェル・都市レヴェル・個人レヴェルという三つのレヴェルがあることを指摘し、それぞれのレヴェルでの皇帝礼拝のメカニズムを明らかにしている。

第六章「キプロスの社会的・政治的枠組みのなかでの皇帝礼拝」では、皇帝礼拝を担う人々、すなわち皇帝礼拝祭司が取り扱われる。藤井氏が指摘するのは彼らに関する碑文は圧倒的に一世紀に集中しており、なかでもユリウス・クラウディウス期に集中していることである。皇帝礼拝祭司にもまた属州レヴェル、都市レヴェル、個人レヴェルの三つのレヴェルがある。また、この祭司は特定の家系に独占されている。彼らにとつて重要なのはローマの有力者との結びつきである。

第三部は「キプロス人の生活の中での皇帝」である。

第七章「祝祭」では皇帝を名誉づけるためにキプロス人によつて行われる祝祭の例が挙げられている。すなわち、オクタウィアヌスのアクティウムでの勝利を記念した祝祭である「エピニキア」、早世したゲルマニクスを記念した祝祭である「カイサロゲルマニキア」、ネロ帝を名誉づける祝祭である「ネロネイア」、ハドリアヌス帝の寵愛を受けたが夭折したアンティノオスを名誉づける祝祭などである。注意すべきは、これらの祝祭は新しく創設されたのではなく、従来からあつたキプロスの宗教儀礼の枠組みのなかに組み入れられていることである。

第八章では「皇帝と時間」が取り上げられる。藤井氏によれば、キプロスでは帝国の暦が導入される。しかしそれは直接的導入で

はなく、キプロスの宗教世界の枠組みの中での導入である。例えば、新年はアウグストゥスの誕生日である九月二三日であり、最初の月の名は *Sebastos* (= *Augustus*) となる。氏はこれを皇帝、ローマの官僚、属州のコイノンの間のコミュニケーションとしてとらえている。また氏によれば、このようにして導入されたローマ・キプロス暦は帝国規模の時間システムの中にキプロスが位置していることを示すものであり、帝国との関係において自分たちを巧妙に位置づけるキプロス人の戦略であるとしている。これはすなわち皇帝と帝国の神々をキプロス人の宗教世界のなかで文脈づけることにほかならない。

終章では藤井氏は次のように述べる。キプロスにおける皇帝礼拝では、皇帝の地位が神と人との間で幅広く位置づけられ、皇帝礼拝は宗教と政治のアマルガム（混合物）として理解されている。そしてそれは直接的な *do ut des* の関係なしに機能している。ローマでは皇帝と元老院は皇帝を神ではなく *princeps* とみなすが、それに対して、キプロス人は皇帝礼拝を自分たちの階層的、競争的な社会や政治の枠組みの中に組み込む。これはキプロスでの皇帝礼拝の内向的な性格を表している。従って、キプロスと帝国中央との個人的な結びつきは希薄である。皇帝礼拝はキプロス人の生活のなかに浸透している。それは祝祭へのあたらしい要素の付加、時間の概念の変更、帝国の時間システムと地域の時間システムの使い分けによってである。従ってキプロス人と皇帝との関係は間接的である。その際ローマの官僚の介在も大きな意味を持った。すなわち、官僚自身による皇帝への奉獻、皇帝の宗教的地位や礼拝の内容の規制がそれである。すなわち官僚は皇帝とキ

プロス人との間のコミュニケーションを容易にした。しかし、彼らは一般に帝国中央との個人的結びつきは提供しなかった。キプロスにおける皇帝礼拝の浸透は「メタファー的な意味における儀礼の移転」でもあり、その際プロトレマイオス朝の事例は参照の枠組みとなる。そしてキプロスにおける皇帝礼拝は地域志向的現象であるので、「ローマ化」という概念は当てはまらない。それは帝国への従属の表現であり、帝国辺境における皇帝権力の地方化のプロセスである。その意味では、皇帝礼拝は「地理的な意味における儀礼の移転」の側面もち、それ故その媒介者が重要となる。たとえばキプロスからローマや他都市への派遣者や交易商人やアスリート（競技者）などである。またローマの官僚もそうである。総じてローマ期キプロスの皇帝礼拝は儀礼の巨大なコミュニケーション・ネットワークの中に位置づけられるのである。

### III

以上、藤井氏の著作の各章を紹介してきたわけであるが、このなかではやはり第四章「キプロス人によるティベリウス帝への忠誠の宣誓」が注目される。というのも、評者は現在、地中海西部における皇帝礼拝の成立について関心があり、なかでもティベリウス帝の果たした役割に注目しているからである。アウグストゥス帝の最晩年の後一〜二三年に、元老院属州ナルボネンシスの首都ナルボで *nunen Augusti* の祭壇が建立されるのであるが、これは一般にアウグストゥス帝が陪審員制度改革の際、ナルボのプレプス（平民）へ恩恵を付与したことに感謝して、建立されたと言われおり、そのことがローマ皇帝礼拝の創設としてとらえら

れた。しかし、その碑文 (CIL XII, 4333) を詳細に検討した結果、評者はこの祭壇は、それに先立つ後六年、ローマでティベリウスによって建立された *numen Augusti* の祭壇をモデルにしたものではないかと考えるにいたった。すなわち、ナルボでの皇帝礼拝の制度化において主導的役割を果たしたのはナルボのプレブスというよりもむしろ、彼らの自然発生的な礼拝をすくいあげ、それを制度化へと方向づけた帝國中央 (おそらくこの場合ティベリウス) であったと思われるのである。というのも後一〜三百年はいまだアウグストゥスは存命中であるが、しかしティベリウス政権成立期でもあり、自己の地位を安定させるためにもティベリウスにとって皇帝礼拝の制度化は重要な政治的かつ宗教的プロセスであった。

翻ってキプロスの場合をみてみよう。当該碑文 (Paphos Vetus no. 8) の問題となる箇所を藤井氏訳によって示せば以下のようになる。「われら自「身」とわれらの子孫は(誓う)、アウグストゥスの子ティベリウス・カエサル・アウグストゥスとその家族すべてに従い、陸海を問わず命に服し、好意を向け、崇拜することを。(さらにわれらは誓う。)彼らと敵味方を同じくし、他の神々とともに、他でもないローマ、アウグストゥスの子ティベリウス・カエサル・アウグストゥスならびに彼の子孫だけに、「[.]」の決「議」を提議することを。」(藤井、註①前掲論文、九四頁) 評者にはこの箇所が、キプロスにおける皇帝礼拝の創設にかかわるものにみえる。キプロスの人々がティベリウスとその家族に忠誠を宣誓しており、当該碑文末の欠落している箇所では、恐らく何らかの礼拝儀礼が決議されていると思われるのである。

皇帝を *Deos* (神) とみなすことはすでにアウグストゥスの時代に始まっているわけであるが、ここではその礼拝の制度化がはかられているようである。

碑文を読むかぎり、キプロスの人々のティベリウスとその家族に対する忠誠の宣誓は一見自然発生的のようにみえる。藤井氏はこれを *do ut des* (「相互授受」) とは関係なく成立している皇帝礼拝ととらえている。確かに一見そうみえるわけであるが、「ナルボの祭壇」碑文を知るものにとつては、やはりここにティベリウスの家系とキプロス (パフォス・ウエトゥス) の人々との間での何らかの結びつきの存在、そしてそれを媒介としたティベリウス側からの働きかけを推測せざるをえないのである。というのも、ティベリウス治世下のパフォス・ウエトゥスに皇帝礼拝祭司として [Tib. Claudius] Rhodokles を名乗る者があり (Paphos Vetus no. 9; Cf. Fujii, *op. cit.*, 116)、またラベトゥスではアドラストゥスという家系が世襲的にティベリウスの皇帝礼拝祭司を継いでおり (Lapethos no. 2; Cf. Fujii, *op. cit.*, 120)、ティベリウスの家系と密接な関係をもったことが推測されるからであり、また二世紀のパフォス・ノウアのことになるが、その都市は *Sebaste Claudia Flavia Paphos* と称しており (Paphos Nova no. 3)、このことからキプロスの都市はクラウディウス家とは緊密な関係を保ちつづけていたことが見て取れるからである。

藤井氏は皇帝礼拝を「皇帝と属州民とのコミュニケーション」という斬新な視角でとらえているが、ティベリウスの家系とキプロスの人々の間の「コミュニケーション」こそが皇帝礼拝の成立にとつて極めて重要であったと思われる。ここで、関連して思い

出されるのは、パフォス・ウエトウスの碑文 (Paphos Vetus no. 8) とほぼ同時期 (アウグストゥス帝の死の直後) にペロポネソス半島南部の都市ギテイオンで作成されたといわれている碑文 (SEG. 11. 922-3) である。かつて、この「ギテイオン碑文」を詳細に検討した阪本浩氏は、一見自然発生的にみえる皇帝礼拝の成立の影に、船海なティベリウス帝の介入を示唆した。このことから、藤井氏が提起している「皇帝と属州民のコミュニケーション」は、その具体的なあり方が問われるように思われる。

藤井氏はこの著作のなかで、皇帝礼拝をあくまでキプロスの宗教的・社会的文脈からとらえており、その意味ではこれまで *rites* (相互授受) を契機として成立したといわれている皇帝礼拝の見方に対して、また皇帝礼拝をローマ化の一環としてのみとらえるこれまでの見方に対して疑問を投げかけている。このことは、ステレオタイプのローマ皇帝礼拝研究およびローマ化に関する研究に対するひとつの批判となっている。結果的には藤井氏の著作はあらたな皇帝礼拝研究の方向に豊かな事例を付け加えたように思う。ただ、藤井氏も終章の最後に指摘しているように、キプロスと外部の世界をつなぐ人々 (派遣者・交易商人・アスリート・ローマ官僚) はコミュニケーションの重要な担い手であるが故に、彼らの実態分析が今後必要となるように思われる。

評者の関心から、専ら第四章を中心に論評する結果になったが、これまで述べてきたように、藤井氏のこの著作は、そこから地中海東部におけるローマ皇帝礼拝の生成および展開に関するきわめて重要な問題提起がなされているという点で、高く評価できるものである。最後に、この著作の巻末に付せられたローマ期キプロ

スの皇帝礼拝に関する碑文史料集について附言したい。この史料集は藤井氏が数多くの関連碑文史料の中から独自に選択・収集したものであるが、ギリシア・ラテン碑文とともに、その英訳も載せられており、今後われわれがキプロスを含む地中海東部の皇帝礼拝を研究する際、その基本史料になるものと思われる。

① 藤井崇「キプロス島におけるローマ皇帝崇拜——ティベリウス帝への宣誓儀礼を中心に——」『西洋古典学研究』五九(二〇一二年)、八四～九五頁。氏はこの論考の中で、「皇帝崇拜」の語を使用しているが、評者はこれまで「皇帝礼拝」を使ってきたので、ここでもそれを踏襲したい。なおキプロス島のローマ遺跡の現状については、以下を参照されたい。上野慎也「キプロス——ヒューラーテースと呼ばれた神——」『ローマ帝国と地中海文明を歩く』(本村凌二編著) 講談社(二〇一三年)、三三三～三五五頁。

② 藤井氏によれば、A. Chanoussis が提起したもので、「儀礼の移転」にはさらに「地域から他地域への」「地理的意味における移転」と、一つの文脈から他の文脈への「メタファー的な意味における移転」とがある (Fuji, *op. cit.*, 13)。

③ I. Gradel は *tyrannus* に *numen Augusti* の祭壇建立を「近代の学問の「霊 (a ghost of modern scholarship)」とまで断言しているが、これは当たらない (Cf. I. Gradel, *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford 2002, 238)。この Gradel 説に対する批判に *opus cit.* D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West*, III 4 (2005), 237-245, 241 および拙稿「*tyrannus* と *numen Augusti* の祭壇奉獻について」『史学論叢』(別府大学史学研究会) 四二(二〇一二年)、五八～六五頁、特に六〇～六一頁を参照されたい。

④ ちなみに、ナルボはティベリウスの父であり、母リウィア（アウグストウスの妻）の前夫であったTi.クラウディウス・ネロがカエサルを命をうけ、前四六／四五年に再植民した退役兵植民市である。それ故都市の正式名称は *Colonia Iulia Paterna Narbo Martius* であり、クラウディウス帝以後は *Colonia Iulia Paterna Claudia Narbo Martius* となった。すなわちクラウティウス家はナルボの都市パトロンのな地位にありつづけたと考えられる。

⑤ 阪本浩「ギテイオン碑文」(*SEG. II. 922-3*)をめぐって『日本文化研究所研究報告』(東北大学文学部附属日本文化研究施設)二二(一九八五年)、一三九～一六一頁。

⑥ 同じ若手研究者によるローマ期地中海東部におけるギリシア・ラテン碑文の収集として、ローマ期ティールに関する奥山広規氏の仕事を挙げておきたい(学位論文『古代東地中海地域の碑文研究——都市ティールを中心に——』(受理番号: 北大甲第六〇二九号。広島大学中央図書館および国立国会図書館で閲覧可)。

(Heidelberger althistorische Beiträge und epigraphische Studien, Bd. 53 (Alte Geschichte), Franz Steiner Verlag, Stuttgart 2013, 248 S., EUR 44, 00-)

(別府大学文学部教授)